

# 『源氏小鏡下』の紹介と翻刻①

安永 美保

〔要旨〕 小槌義雄氏御所蔵の『源氏小鏡』に類すると思われる写本を拝見する機会があり、翻刻の御許可をいただいた。この小槌氏蔵本は新出本で、紹介もされていない。そこで、今回翻刻・紹介する次第である。

書名は表紙左肩題簽に「源氏小鏡下」とある。また、表紙中央大字の「源氏鏡下」は後に書き込まれた可能性が高い。本文は十行書きで、巻名の後にあらずじとその巻で詠まれた歌がいくつか収録されている。

題簽にある『源氏小鏡』は『源氏物語』の代表的な梗概書の一つであり、伝本や異本も多数存在する。したがって、本書も『源氏小鏡』に類するものと考えた。しかし、残念ながら上巻は失われており、『源氏小鏡』に類するものであるということ以外、章だてや書写した人物・年代等に関する情報は不明である。しかも、確認できた公刊されている『源氏小鏡』の中に小

槌氏蔵本と類似した本文を持つ本はなかった。巻の前半部分や見返しのないことから断定はできないが、『源氏物語』の梗概書の新出写本である可能性がある。

〔キーワード〕 源氏小鏡<sup>げんじこかがみ</sup>・源氏鏡<sup>げんじかがみ</sup>・源氏物語梗概書<sup>げんじものがたりごうがいしよ</sup>

## 『源氏小鏡下』の紹介

京都市在住の小槌義雄氏御所蔵の写本を拝見する機会があり、翻刻の御許可をいただいた。この小槌氏蔵本の調査や報告・紹介は行われていないようなので、ここに紹介する次第である。

はじめに本書の書誌を示す。本書の体裁は二巻二冊で、寸法が縦27・0×横20・0 cmの特大本である。料紙には楮紙を用い、

装丁は袋綴じである。表紙は原表紙で、本文とは異なる筆跡で中央に大字でそれぞれ「源氏鏡上」「源氏鏡下」とある。上巻は表紙左肩に題簽の跡はあるものの、現物は残っていない。一方で、下巻は表紙左肩に本文同筆で「源氏小鏡下」の題簽がある。

この写本は当初は上下二巻の完本と思われたが、上巻の本文は『源氏物語』とは全く異なる内容であった。上巻の装丁は下巻とほぼ同一であるので、後世に内容の異なる二冊をセットにし、その際に表紙中央大字の「源氏鏡上」「源氏鏡下」と書き込んだ可能性が高い。上巻の詳細な調査は必要であるが、本稿では外題に沿った本文を持つ下巻を調査対象にした。

下巻には表紙中央に直接「源氏鏡下」と記されている他に、左肩に「源氏小鏡下」と書かれた題簽も残っていた。本文は十行書きで、巻名の後にあらすじとその巻で詠まれた歌がいくつか収録されている。『源氏鏡』と題される本は『国書総目録』をみると、名古屋市立鶴舞図書館蔵『源氏鏡』一巻本がある。

一方で題簽の『源氏小鏡』<sup>〔注〕</sup>の方は、『源氏大鏡』と並ぶ代表的な梗概書であり、伝本や異本も多数存在することから、本書も『源氏小鏡』に類するものと考えた。

しかし、確認できた『源氏小鏡』の中に、小槌氏蔵本と一致あるいは類似した本文を持つ本は見当たらなかった。前半部分や見返しのないことから断定はできないが、小槌氏蔵本『源氏小鏡下』は『源氏物語』の梗概書の新出写本である可能性がある。

小槌氏蔵『源氏小鏡下』は「十六おとめ」からはじまり、少女巻以降から夢浮橋巻までに雲隠巻（巻名の記載のみ）を加えた三十五の巻について書かれている。残念ながら本来の上巻は失われており、『源氏小鏡』に類するものであるということ以外、章だてや書写した人物・時期等に関する情報は不明である。

なお、本稿では頁数の都合上少女巻から若菜下巻（二十八丁の表まで。柏木巻は巻名のみはいる）までの翻刻にとどまった。今後は夕霧巻以降の後半部と詳細不明の上巻についても随時掲載したいと考えている。

最後になったが、翻刻を御許可下さった小槌氏ならびにご紹介下さった和田洋子氏には深くお礼申し上げます。

(注)

(1) 南北朝時代に成立したとされる『源氏物語』の梗概書。

作者は従来一部の写本に「勝定院殿（足利義持）、耕雲進上之」と記すことから耕雲（花山院長親）の作と考えられてきたが、改訂・増補者の一人とする見方もある。成立当初は非青表紙本の本文を用いていた（第一系統／古本系）が室町中期以降において青表紙本によって改訂された第二系統本（改訂本）がある。この他に、第三系統本（増補本）・第四系統本（簡略本）・第五系統本（梗概中心本）・第六系統本（和歌中心本）がある。諸本は多数あり、大半が『源氏小鏡』の名称をもつが異称名も多い。巻末等に付された年号等の識語によって諸本の特定も可能な場合もあるが、刊行年の記されない場合もある。小槌氏蔵本にも書写年代は記されていない。

【翻刻】

○凡例

- ・小槌氏蔵『源氏小鏡下』を翻刻する。
- ・文字遣いは底本どおりに表示するよう心がけた。
- ・和歌の表記は底本では三字下げであるが、二字下げにした。
- ・また、詠み手が明記されている場合はへ／＼で記載した。
- ・巻名の表記は底本では三字または四字下げであるが、四字下げに統一した。
- ・底本における改行は／で示した。ただし、和歌と巻名は右記のとおりに処した。
- ・底本における改頁は」で示し、そこまでの丁と表裏を（ ）で記載した

源氏鏡下（表紙中央に大字で記載）

源氏小鏡 下（表紙左肩の題簽）

#### 十六おとめ

源氏の若君十二にてけんふくし中将にもなし雲のうへの／すま

ひせさせたけれどもいとけなき時くもんせさむ／と大かくしよへいらせたまふわかきみおりふし三条へかよはせ／たまひけるにけんしの若君と二条のひめ君殿なからひの／よき事を二条の

大臣はしりたまはずや女房たちのさ／さやきけるを大しん聞つけて源氏の御子にてもあれ／六位すへせは然へからすひめきみを二条へむかへとるへ／しとて女房にたくふくめてかへりたまふてのち源氏の／若君二條へ住みたまひ姫君の御かたへこゝろさしてしやうし（一オ）あけんとしたまへともかきかねかけていれたまはねはひめ／きみもきこしめし御心たかへすかよひとれはそらねいり／して聞たまふ時雁のなくを聞て雲ゐの雁も我／ことくと姫きみのたまふ時

さよなかのとはとひわたる<sup>（注）</sup>かりかねの／うたてふきそふ萩のうは風

二条の大臣より御むかへに車参りて姫君求させたまふ／時わかきみ文つかはして

〈まめ人〉くれないの涙にふかき袖の色を／あさみとりとやいゝしつるへき（一ウ）  
いろ／＼の身のうきほとしのしらるゝは／いかにそめける中のころもそ

姫君のかへりたまひけるつきの夜わかきみは露まとろ／ますなきあかしつゝひるは人めもはつかしければあけほのに／大かくしよゑわたらせたまひて

〈まめ人〉霜こほりうたてむすへるあけくれの／そらかきくもり<sup>（注）</sup>ふるなみたかな

そのとし御せつのまひにあたるひかしは二条の大臣西の対／源氏の大しんなりけんしのまひ姫はこれみつかむすめの／十三ほとになるにけんしいなのはらひせさせまひををしへ（二オ）その日ちかく成けるにむらさきのうへの御まへにてなら／しをまはせつまとのまにひやうふをたてゝ舞姫を／やすめたまふに源氏の若君御めをとめ舞姫の衣／のつまを引ゆるかして

〈まめ人〉雨にますとよおかひめのみや人も／いま心さすしめをわするな

けんしの大臣すまの浦にこころよせたりし五節の舞の／きみをおほしめし出て御ふみ

おとめこか神さひぬらんあまつ袖／久しきとも<sup>（注）</sup>のよわひへぬれは（二ウ）  
十夜のおかりのまひひめをやかてなひしのすけにたて／みやつかいさせんとちゝこれみつかかねておもひまふけたり／けれど

も源氏の若君のまひ姫にこゝろをかけ御ふみあ／そはしつかわ  
されたるをちゝこれみつみてさらは此君を／むこにとらは  
やとおもひて此ふみに

日かけにもしるかりけめやあまつそら／おとめか袖にかけ  
しこゝろを<sup>注</sup>

けんし六条院をつくり爰かしこにおきたまへる人々を／一とこ  
ろにすませたてまつらむとまつむらさきのうへは／春をこのむ  
御かたなれはとかく梅さくらつゝしやま<sup>（三才）</sup>ふきをうへさ  
せけるの御かたとなつけひかしみなみのすみ／かけてすみたま  
ふにしのみなみおもてはあかしのひめ／きみのすみ家梅つほの  
中宮は秋をこのみたまふ／人なりこ人御はゝ宮す所のふかきま  
ちなれはにしむ／きのつほに秋の花さく草ともをうつさせは／  
しかひての紅葉面白きを中宮の御さとる所／にさためたまふう  
しとらのまちは夏のかたに名付／卯の花たち花夏草の花うへて  
春ちる里すみ／たまふ北面屋のかたにてゑたおもしろき松をう  
へ／山をつかせてすませたまふ家来の人々は六条院<sup>（三ウ）</sup>へ  
うつらせたまふ梅つほの中宮も五六日して車七りやう／にてう  
つりたまふ花ちる里まめ人のしこういとなみ／にて車五りやう  
にてあかしのうへはけんしのいとなみ／にて車八りやうにて十

一月にうつりたまふむめつほ／の中宮は神無月の此さとゐさせ  
たまひ色こき／はしかひてもみちおらせつゝらのふたにおき我  
か／女房にもたせむらさきのうへの御かたへおくりたまふ

〈梅つほ〉心から春まつそのはわかやとの／もみちを風の  
つてにてもみよ

〈紫のうへ〉風にちる紅葉はかるし秋の色<sup>注</sup>を<sup>（四才）</sup>  
いはねの松にかけてこそみめ

#### 十七玉かつら

玉かつらのひめきみのちゝは二条の大しん母はゆふかほ／のう  
ゑなりはゝ木々のなてしこの事なり三にて母／ゆふかほのうへ  
におくれめのとにやしなはれてすすしに／此めのとゝも此つく  
しのたさいの大式にてかるし人の女房／なれは姫きみをもつく  
しへゐさなひたてまつら／むともろともにふねに乗はるゝく  
たりけるに人／をかしければゝ君はいつくそとのたまゑはちく  
せんの／かねのみさきなをゆくすゑは大しまとふる子<sup>（四ウ）</sup>  
とも申せは

〈少式きたのかた〉船人もたれをこふとか大しまの／うら  
かなしけにこゑのきこゆる

〈むすめ〉こしかたもゆくゑもしらぬおきに出て／あはれ  
いつくときみをこふらし

大貳は五年のとし月をへて都へひめきみをくし／奉りてのほる  
へきころをひ少貳そのかたとも／せけんのやまふにおかされて  
かくれぬ大貳の子におとこ／四人の中にひめ君おき奉りてまつ  
らとゆふ所にし／のひてすませ奉りけるをひめ君のいつくしき  
（五オ）「事をつたへ聞てむかへ奉らんとゆふ人おほしせうにか  
／子とも此姫君はかたはにおわしけるといらさかへ／てけんそ  
くおほくもちけるか此姫君をむかへ得／奉らんと申はひめきみ  
聞入たまはねは

きみにわか<sup>（注6）</sup>こゝろたかはゝ松らなる／かゝみの神をか  
けてちかはむ

ひめきみ御返事をしたまはねは御返事のたまはらすは国へ／も  
とるましきよし申せは

としをへていのるこゝろのたかひなは／かゝみの神をつら  
しとやみむ（五ウ）

せうにか子の四人の中おほむすめと中むすめと大夫／のけんを  
むこにとりてそのかけにて我らすきはやと／いへはおほむすめ  
の豊後のすけおともうと二人当時／の関白殿のひめきみを下

臈の女房になし奉る／へきかとしてまつらのなきさの松の影より  
船を／したてひめ君のせ奉り御供申てのほりけるにかし／豊後  
の助かいもふと

うきしまをこきはなれたる船後<sup>（注7）</sup>には／いつくとまりと  
しらすのあるかな

ゆくさきもしらぬなみち<sup>（注8）</sup>にふなてして（六オ）「風にま  
かする身こそうきたれ

磯におい風出きて程なくひしきのなたといふ所をちい／さき船  
のとふまにきけるをかいそくおほきひゝ／きのなたとそおそろ  
しきところと申せは

〈玉かつら<sup>（注9）</sup>〉うき事にむねうちさはくひゝきには／ひ  
らきのなたも名のみなりけり<sup>（注10）</sup>

津の国のかわしりといふ所に船つきそれより都へ上り／九条あ  
たりにやとをとりておわしけれとも廿年はかり／をへたてたる  
事に二條へたよりもなかりけるにやわたの／神こそ人のくわ  
んを見てたまふなれと人の申せは八幡ゑくたり（六ウ）こもり  
たまゑるにある人はつせのほとけこそ人のいのり／をかなへた  
まへと申せはのり物なければかちにて三日と半にはつせ／につ  
きやとりやすみたまふ所にこゆふかほのうへにめし／つかはれ

けるうこんといふねうはう六条の院紫の／うゑにめしつかはれけるにわかしうゆふかほのうへの姫君に／と一度あわせたまへとはつせへ月まふてしけるにこれにおりふし／奉りあひたりこれもまいるたひ事のやとにて人を／まつつかはしければ座せきをしつらいたゝみを二てうか／さねにしきひめきみをはさせきをのけやふれたるたゝ／みにおき奉りたる只今きいにたいり女房参り（七オ）「たまふとなりあへるのり物よりおりやすみける所にふんこ／のすけ三てうとよへはかまのまへよりとしよりたる女／こたゆるこえは我かしうゆふかほのうへこそしもつかた／の三条といふをめしつかはれしとおもひのそき／てみるにとしはよりたれ共すこしみしりたる／やうなればちかくへよひて事の子細をたつぬるに／そ名乗けるさてはひめきみのゆくゑやしりたて／まつるしらせてゑさせよといへは此あひたつくしの／松浦にすませたまへるをのほせ奉りたゝいまこれへ参り／たまへると申せはいづくにわたらせたまふそとへはゆひを（七ウ）「さしてこれにと申せはいそきしやしをあけてみ奉りける／にしほ風にもまれてやせくろみたまへとも見入けたて／ましましけるをわかさせきをさりてよひ奉りなき／みわらひむかしの事との事とも申

「うこん」ふたもとの杉のたちとを尋ねすは／ふる川のへにきみをみましや

「玉かつら」はつせ川はやくの事はしらねとも／けふのあふせに身さへなかれん

やかて御とも申三日こもりしてくわんはたしのり物たつ／ねみやこへのほらせ奉り五条あたりにわか屋とのありけるに（ハオ）「入奉り我が身は六条院ゑまいりけんしむらさきのうへと／物かたりしてわたらせたまへる所にうえ参りたればはつせ／まふてにりしやうかうふりたるかといたまへは月まふて／のしるしにりしやううたかひなしゆふかほのうへのひめ／君にたつねあひまいらせと中将はやかて御ふみ／つかはして

しらすともたつねてしらんみしま江に／おほるみくりのすちはたへしを

かすならぬみくりは何のすちなれば／うきにかへしもねを  
とゝめけむ<sup>（注）</sup>（ハウ）

ゆふかほのうへのひめきみときこしめすよりなつかしく／おほし二条へもしらせ奉りたけれども我かやうしにせんと／花ちる里のすませたまふにしのたいをしつらい車三にて／むかへとりうこんをさしかへてかしつきたまふに

〈けんし〉恋わたる身はそれなから玉かつら／いかなるす  
ちをたつねきぬらん

暮としくればは人々のかたさまへしやうそくのきぬく／はら  
せたまふにすゑつむ花のきぬはおとりければ打／えみて

きてみればうらみられけりからころも（九オ）返しやして  
ん袖をかへして（注12）

かゑさむといふにつけてもかたしきの／よるのころもをお  
もひこそやれ

ならひはつね

正月たつ一日の日六条院にさま／＼の御ゆはゐさせ／たまひ御  
まへのいけを御らんして

〈けんし〉うすこほりとけぬるいけのかゝみには／世にく  
もりなき（注13）かけそなしへる

〈紫のうへ〉くもりなきいけのかゝみに萬代を／すむへき  
かけそしるくみえける（九ウ）

あかしのうへよりひけこひはりこにゆはひのくた物つませて／  
五よふの松にねの日の御ふみつけみなみのたゐのひめ君／の御  
かたへおくらせたまふ

〈あかしのうへ〉とし月を松にひかれてふる人も／けふう

くひすのはつ音きかせよ

〈おなしひめ君〉引わかれとしはふれともうくひすの／す  
たちし松のねをわすれめや

ならひこてふ

梅つほの中宮のふんしのためにやよひのすへに里／ゐさせたま  
ひたうときひしりをあつめきやうよませ（十オ）舞樂をとゝの  
へさせたまふむらさきのうへこそ神無月／のもみちの返こと  
せんとあたらしくふねをつくらせわらわをのせ花たてを船にの  
せ御前の池を秋のかた／のわたとのゝきはへこきよせてわらは  
たちのはやし物に

春のいけやいての川瀬にかよふらむ／きの山ふきそこに  
にほへる

かめのをの山をたつねし船のうちに／をひせぬ名をやこゝ  
にのこさむ

かゝるしたてにみはしのうへにて御かわらけまいらせさかもり  
／中はに玉かつらの姫君いつくしき事をひやふきやうの宮に六  
条（十ウ）院かたらせたまへは

〈兵部卿〉むらさきのさとに（注14）こころをしめられは／ふ  
ちに身なけむ名やはをしけき



〈けんし〉ふちに身をなけつへしやは此春は／花のあたり  
をたちさらて見よ

花たてをむらさきのうへおくらせたまふ文に

〈紫のうへ〉はなそのゝこてうをさへやした草の／秋まつ  
むしはうとくみるらむ

〈秋このむ中宮〉こてふにもさそはれなまし心ありて／八  
畠山ふきのへたてさりせは（一一〇）

ならひほたる

兵部卿は玉かつらをいかにもして見はやとおほしめし／うす物  
にほたるをつゝみきちやうのうちへなけ入たまへはつた／畠  
らんとするにしやうそくをとりてなけかけたまへは

なくこ畠のきこへぬむしのおもひたに／人のけつにはきゆ  
る物かな

〈玉かつら〉こえはせて身をのみこかすほたるこそ／ゆへ  
にもまさる（注）おもひなりけれ

ならひとこなつ

六条院はたまかつらのきみをつるには二条の大臣聞つ（一二ウ）  
けてとしるへき事とおほして

なてしこのとこなつかしきいろをみは／もとのかきねを人

やたつねむ

山かつのかきねにおひしなてしこの／もとのねさしをたれ  
かたつねむ

ならひかゝり火

六条院玉かつらをやうしにしゝたひけるかみる／につきてもゆ  
ふにましませは御心にやかゝりけむ

かゝり火にたちそふこひのけふりこそ／よにはけされ  
ぬ（注）ほのほなりけり（一二〇）

ゆく畠なきそらにけちてよかゝり火の／たよりにたくうけ  
ふりなりせは

ならひ野わき

のわきの風つよくふきみやこの家ともみな／たをれ六てうの院  
のかわらふきのわた殿もふき／たをす人おほくいのちをうしな  
ふまめ人の／中しやうは大里三てうの大宮六条院のめくりあり  
／きて人をよひのゝしりたまへは花ちる里あかし／のうへむら  
さきのうへまでもまめ人をたのもし／人とおほしける夜もすか  
らふきあかして侍に（一二ウ）風にふきければいもうとのあか  
しのひめ君の御かた／梅つほの中宮のかたにてもこ夜の風のお  
そろし／き事とふらいあかしのうへへの御方にもとふらい／たま

へはことのてまさくりして

大かたのおきの葉すくる風のおとも／わか身<sup>(注7)</sup>ひとつに

しむこゝちして

玉かつらの姫君の御かたにても野わきのとふらふに

ふきみたる風のけしきにをみなへし／しほれしぬへきこゝ

ちこそすれ

下露になひかましかはをみなへし(二三オ)あらし風には

しほれさらまし

まめ人はかくるあらし風ふく時も二てうのひめきみ雲／ゐの雁

の事わすれすおほしければ御ふみあそはし／かけたるかるかや

につけて二条ゑつかはしたまふ

野わきふきむら雲まかふ夕部にも<sup>(注18)</sup>／わするゝまなくわ

すられぬ君

ならひみゆき

れんせい院そのかみをたゝしておしほ山のみかりありけんし／

たひゝ／申給ふによりて御門おほしめしたちて／かந்தちめほ

くめんにいたるまでみなたゝすへておしお(二三ウ)山へ御礼

申六条院の大しんは風のこゝちにていてたまはず／玉かつらに

物みせさせ奉らむと車五六りやう御とも／にてをしほ山へいた

し奉りたまふはしめのかりはの／とりへつかい松のえたに付て  
六てう院へおくりたまふ

雪ふれは<sup>(注19)</sup>をしほの山にたつきしの／ふるきあとをもけ

ふはたつねよ

おしほ山みゆきつもれるまつはらに／けふはかりなるあと

やなからむ

玉かつらのちゝ君の大臣にたいめんしたまふへしとそのまふ／

けしたまへはむらさきのうへあかしのうへ花ちる里より(二四

オ)裳御さしあはせのきぬたきもののけともおくり／たまふ

すへつむ花も人なみに衣をくりたまふ御ふみに

〈すゑつむ花〉わか身こそうらみられければ衣／きみか

たもとになれすとおもへは

〈けんし〉から衣またからころもからころも／かへすゝ

もからころもかな

ならひ藤はかま

三てうの大宮かくれたまへは玉かつらもまこなりまめ人のさい

し／やう中將もまこなれはおなしく夜衣きさせたまふまめ人／

らんの花をおりてみかうしにつかはす(二四ウ)〈

まめ人〉おなし野の露にやつるゝ藤はかま／あはれをか

けよか事はかりそ

〈玉かつら返し〉たつぬるに春けき野への露ならば／うす  
むらさきやかことならまし

玉かつらをひけくろの大しやうのつまにさためたまふ内へ／参  
り内侍のかみにたちたれよりむかいたまひし神無月／の頃とさ  
ためたまふに

かすなはいとひもせましなか月に／いのちをかくるほと  
そはかなき

ほたるのひやふきやうのみや猶玉かつらの御方へ文をつかはし  
て「一五才」

あさ日さすひかりをみても玉さゝの<sup>（注20）</sup>／はわけのしもを  
けたすもあらなむ

こゝろもてひかりにむかふたまさゝの／あさをく霜をおの  
れやはけつ

ならひまきはしら

ひけくろの大將玉かつらのすみ家へとのるにゆくへしと／なを  
しめかへてたき物たきかほしいてたちたまへはもとの／きたの  
かたあまりねたきにや大しやうにひとりのはるをうち／かつけ  
たまへはなをしの袖もみなひのこかゝりてこけれけ／れはこ夜

は出したはず文はかりつかはして「一五ウ」

〈ひけくろ〉こゝろさへ空にみたれしゆきもよに／ひとり  
さへつるかたしきの袖

ひけくろのものと北のかたいたくあひする心すへきにあら／ね  
はちゝ式部卿の宮より車こひて出たまふとき此北／方のひめき  
みの十三になりたまふもはゝ君ともに出／たまひけるにやとの  
なこりををしみ文あそはしまき／はしらのわれたる所におし入  
ていつるとて

今はとてやとかれぬともなれきつる／まきのはしらは我を  
わするな

#### 十八梅枝（一六才）

あさかほの宮より源氏のひめきみの中宮にたゝせたまふ／へき  
御さしあはせのためをくり物二かさねにたき物のけ二／そへて  
六てう院へおくりたまふちりすきたる梅の枝  
に御ふみつけて

〈あさかほのみや〉梅か香<sup>（注21）</sup>はちりにし枝にとまらねと  
／うつらむ袖にあさくしまめや

むめか香<sup>（注22）</sup>にいとゝ心のしむるかな／人のとかめむかを

はつゝめと

六条院には姫君の中宮にたゝせたまふへき御ゆわひ／のかみそ  
きの日をゑらはせたまふたき物あはせに御くらに（二六ウ）つ  
みおかれたるかうともとりいたしてくらにたき物のいそゐ／を  
かせつゝたかれてかきをあつめてかなまなの本かゝせ／ゑかゝ  
せたまひたき物のこゝろみにはほたるの兵部卿／のみやむらさ  
きのうへあかしのうゑ花ちる里梅つ／ほの中宮より御さしあは  
せのたき物とも参り／けるをこれはかれはとそろゑ御ゆはゐの  
かわらけ／まいらせひわことふき物ともとのへ楔いのり／の  
かくせさせたまふとて

〈兵部卿の宮〉鶯のこゑにやいとゝあこかれむ<sup>注23</sup>／こゝ  
ろしめたる花のあたりは（二七オ）

〈けんし〉色とかのうつるはかりにこのはるは／梅さくや  
とをかれすもあらなむ

〈まめ人<sup>注24</sup>〉うくひすのねくらの梅<sup>注25</sup>もなひくまで／  
なほふきとをせ夜半のふゑ竹

〈かしはき<sup>注24</sup>〉心ありて風もかよゑる<sup>注26</sup>はなの木に／  
とりあへぬまでふきやよるへき

〈へんの小しやう〉かすみたに月と花とを別てすは／ねく

らのとりもおとろきなまし

人々とま申てかへりたまふあしこおり物二かさねたき物のけ  
／に兵部卿のみや別とて物す大臣出したまへは（二七ウ）

花の香をゑならぬ袖ぬうつしなは／ことあやまりといもや  
とかめむ

めつらしと古郷人はまちそみむ／花のにしきをきてかへる  
きみ

一九藤のうらは

源氏の御子まめ人の中將御いもふとあかしの姫中宮／にたゝせ  
たまふ御ゆわゐに中納言右大将にあらせたまふ／こてうのちゝ  
の大匠まめ人をかひ臣とてむこにきらひおと／めの巻に我ひめ  
きみを二条へとりよせておきた／まひけれとも源氏もまめ人の  
そのちちは何とも（二八オ）いゝたまはすいまはひめ君もさか  
りにならせたまへと／もまめ人の中納言をおき奉りてはたれや  
／の人を婿にとるへき今はよひ奉らはやと御／子かしはきをめ  
しといたまへはかしはき御つかひに参る／へきよし申されけれ  
はやよひのすゑの藤のさかりに／文と藤のゑたにつけてつかは  
したまふ

〈二しうの大しん〉我やとの藤のいろこきたそかれに／た  
つねやはこむ春のなこりを

〈まめ人〉中々におりやまとはむふしのはな／たそかれと  
きのたとくしさに（二八九）

かものまつりすきて源氏のかあしの姫君中宮に／たゝせたまひ  
雲のうへにまいらせたまへは村さきのうへけひ／しやくの御と  
もにて三日そひまいらせてまかてさせ／たまへはそのかわりに  
ややかてあかしのうへ御かわりにて車／ゆるされて雲のうへに  
まいらせたまふひたすらそひ／奉りたまふかゝる御ゆわひすき  
てまめ人はひきい／れの大しん殿のすみ家をゆつりゑたまへは  
二条の／姫きみをむかへとりてすませたまふ六位ときゝひた／  
りしさいしやうの君も御供にて三てう参りゑたれたまふ

〈まめ人〉あさみとりわか葉のきくの露にても（一九〇）

こきむらさきのいろとかけきや

二葉よりなてつるそのゝきくなれば／あさきいろわく露も  
なかりき

この秋のくれにれんせい院六条あんへ行幸なりて／源氏を大政  
天皇になし奉りたまふしゆしやく院／も御幸ある二条の大臣は  
御門の御ともに六条／院へまいらせたまふ

〈六条の大しん〉いろまさるまかきの菊もおり／くに／袖  
うちかけし秋をこふらし

〈山の御門〉秋をへてしくれふりゆく里人も（二九ウ）かゝ  
るもみちのおりをこそみね<sup>（注27）</sup>

〈六てうの院〉むらさきのいろにまかへるきくの花<sup>（注28）</sup>／  
にこりなき夜のほしかとそみる

〈れいせいゐん〉世のつねのにしき<sup>（注29）</sup>とやみるいにしへ  
の／ためしにひけるにはのにしきを

甘わかなの上

ゆふかほの内侍のかみのやしなひをや六条の院を／四十の御賀  
にわかな奉りたまふとて

〈玉かつら〉わか葉さす野へのこまつを引つれて／もとの  
いはねをいのるけふかな（二二〇）

〈六てう院〉こまつはらすへのよはるにひかれてや／野へ  
のわかなもとしをつむへき

女三の宮よき日をゑらひ六条の院へうつりたまひしんでん／し  
つらる大臣の御上にさためすませたまふむらさきのうへはあ／  
ちきなくおほしめしつらつゑつきて

めのまへにうれへはかわる世の中を<sup>〔注30〕</sup>／ゆくすゑとをく  
ちきるころかな

六てう院は女三のみやにむらさきのうへたいめんしたまへと／  
たひ／＼のたまへはたいめんしたまふへきにさたまりければお  
なし／＼明石のうへもたいめんしたまへとたひ／＼のたまへ  
はたい<sup>〔二十ウ〕</sup>めんしたまふへきにてその夜をさためてその  
ひまに六条／院おほろ月夜のかたへわたりて返りたまふあした  
／藤の花を一ゑたおりておほろ月夜につかはすとて

〈けんし〉しつみしもわすれぬ物をこりすまに／身をなけ  
つへしやとの藤なみ

〈おほろ月よ〉身をなけんふちかまことのふちならて／な  
をこりすまに名をやなかさむ<sup>〔注31〕</sup>

大臣女三の宮をかしつきたまふをつらくやおほし山のけし／き  
のかはり行を御らんして

身にちかくあきやきぬらんめのまへに<sup>〔注32〕</sup>（二十一オ）あ  
を葉のやうす<sup>〔注33〕</sup>もうつろひにけり

水とりのあをははいろもかわらぬに／萩のしたゑそけしき  
事なる

あかしのあま君ひめ君中宮にたゝせたまひて程／なくわか子た

んしやうなりていつくしましますに／きゝたまひていかにも  
して一め見まいらせんとひまを／もとめ中宮の御方へのゝしり  
出給へはあかしのうへか人め／しけきに何とて出させたまはぬ  
そとひき入たて／まつれとも中宮を見まいらせなみたをなかし  
たまひて

〈あま君〉老のなみかひあるうらを立いて、<sup>〔二十一ウ〕</sup>  
しほたるゝあまをたれかとかめむ

八十にあまる人たうのあかしの裏と申所にすみ侍るをす／てゝ  
なとこまかにかたりたまへはあはれとゆゝしくおほしめして

〈あかしの中宮〉しほたるゝあまをなみちのしるへにて／  
たつねもみはやうらのとまやを<sup>〔注34〕</sup>

上もにうたうのことをさすかひとしほ思ひいてゝ涙をおさへて  
〈あかしのうへ〉世をすててあかしのうらにすむ人の／こゝ

ろのやみははれましもなし<sup>〔注35〕</sup>

あかしの中宮わうし御たんしやうならせたまへは彼わうしやか  
て／春宮にたゝせたまへはあかしの入道の方へ太政大臣のつ  
（二十二オ）かさをおくらせたまへはにうたうふかき山へ入ら  
んとて明石の／うへの御かたへみたりしすみよしの夢のつけの  
ことかき／あつめ大なるはこに入たから物とものひきそろえて

み子／の大とくをつかいにて奉るとて

ひかりいてんあか月ちかくなりにつけり／いまそみし夜の夢  
かたりする

六てうの院しんでんの庭にてまりのあそひのつゐてにつな／き  
たるねこの庭にはしり出けるにつなにて御簾を／ひきあけたる  
すきまより女三の宮のたちすかたを一め／みえてかしは木の恋  
のやまゐとなりてかへるとて（二十二ウ）

〈かしは木〉いかなれば花にこつたふうくひすも／桜をわ  
きてねくらはとせむ

女三の宮恋しき身にしみて彼めのとのこゝししうゑ／文をつか  
はして

よそにみておらぬなけきはしけられと／なこり恋しき花の  
ゆふかけ

女三の宮のめのとこ侍従返事申けるに

いまさらに色にないてそやまさくら／およはぬ枝にこゝろ  
かけきや

わかなの下（二十三オ）

中宮は御さんあかせたまひて内にしきりにまたのほりたまふへ  
しと／御つかいありてまいらせたまへはのりゆみは二月はしめ

にあるへき事な／れとも中宮の御さんのことによりことしは三  
月のすへとのひ／てのりゆみの御さたありけれともかしわきは  
女三の宮の恋／しきにたへかねて女三の宮のかはせたまふねこ  
のはらから大／内のきりつほにありけるを申たまひてかの女三  
の宮／の御かたしろになて、

恋わひてそのかたしろにてならせは（金部）／なれよなにとて  
なくねなるらん

まきはしらの姫君はひけくろのちゝ内大臣になりてかく（二十  
三ウ）れしたひてのちまきはしらのひめきみはほたるの兵部  
卿／の宮のきたのかたに成たまふあかしのかたへ入道のゆく末  
もしらず／み山へ入たまふとてあとの仏事したまふへからすたゝ  
／春宮の御いのりをしたまへといゝつかはしけるをよくゝみ  
たま／ひ大臣にいとまをこひひたすらあま衣に身をかゑんとい  
とな／みたまふを大臣あやしくおほしたつねたまへは彼住吉の  
夢の／つけの文のはこをみせたてまつりたまへは大しんひとへ  
に中宮／にて住吉のゆめのつけのことゝ彼めくみなりとよろこ  
ひ／やりて住吉まふてのいそゐしたまひて中宮御幸の時あかし  
／のうへ神のめくみをおもひわけて（二十四オ）

〈あかしのうへ〉たれかまたこゝろをしりてすみよしの／

神代をへたる松に事とふ

〈あかしのあま〉すみのへにいけるかひあるなきさとは／  
としふるあまもけふやしるらむ

〈あかしのめのと〉むかしこそまつわすられね住吉の／神  
のめくみ<sup>(注37)</sup>をみるにつけても

あかしの中宮大内のほかの物みはしたまはねはまして宮この／  
ほかの住吉まふてめつらしければ

〈あかし中宮<sup>(注38)</sup>〉すみよしの<sup>(注39)</sup>まつに夜ふけておく霜  
は／神のかけたるゆふかつらかも<sup>(二十四ウ)</sup>」

あかしの入道わかかりしとき住吉をしんしてとしまふてして／  
こもりけるに夢にひめをまふけて大きみしたしき人をむ／こに  
とりてまこにひめきみまふけて中宮に立わうし御たん／しやう  
なりてひまこにとう宮をもたせたてまつるといふ夢の／すいさ  
うをみるにしゆみせんをいたき月日をいたきちい／さき船にの  
りひろきうみをにしへこき行といふ夢のつ／けありて我かもと  
へくたしてのちひめをゆめのことくまふけ／たるのちむすめの  
いのりのために世をいとひきやう人となるなり此事共を大成  
かみの六まひに書あつめて明石／のうへに奉りけるを源氏の大  
臣にみせ奉りければあかし<sup>(二十五オ)</sup>」の中宮はすみよしのめ

くみなりとよろこひすみよしへ／まふてさせたまふ中宮とむら  
さきのうへは車あかしと／あま君とはひとつ車そのほかけんし  
のおとゝはを初め／くるま三十りやうにてまふてたまふよろこ  
ひの神楽／まいらせ霜月のなかには宮こへ返りたまふそのとし  
／もくれつきの正月に山の御門の五十の御賀の御幸／二月廿日  
頃に女三の宮申させ給へは正月廿日あまり／ふしまちの月の頃  
六条院のしんでんにて女三の宮／はしやうのことむらさきのう  
へはきんのことあかしの中宮／はあつまのことあかしのうへは  
ひわまめ人はよこふゑその<sup>(二十五ウ)</sup>「子はしやうのふゑ侍従  
はひちりきのやくにて女樂なら／はせたまふ<sup>(注40)</sup>二月のはしめ  
の頃よりむらさきのうへ風のこゝちおもくならせたまひけれ  
はこゝは物あしきにとて二条／院にしのたぬにうつし奉りてひ  
たすら御いのりし／たまふ源氏もうちそひておはしけるひまに  
かし／はきは女三の宮のめのとこしゝうをむかへて我を女／三  
の宮と一夜のちきりむすはせてゑさせよとて／色々たから物と  
もとらせすかしたまへはおりをゑて申／さむとて返りぬかもの  
まつりのまへの日あすのあほ／ひかさらむと御まへの女坊みな  
こゝかしこのつほね<sup>(二十六オ)</sup>」にこもりてきぬたちぬるたま  
ふひまによき時そと／かしは木のかたへこ侍従文をつかはしけ



れはかしは木つ／まとのまよりもいりぬ女三の宮は源氏のゐたまふ／おましにひとりふしたまひけるを御ましのうへをおそ／れてこの下へいたきおろし奉れは人やあるとめし／けれども侍従かわきなれは奉るものなし女三の／宮はあせ水になりてひたすらむつかるはかりにて／何かの事もたまはすへるあしたの明ほのにせめて／一こゑなりとも我にきかせたまへとつまとのくちへ／いたき出し奉りて（二十六ウ）

おきて行そらしられぬ明暮に／いつくの露のかゝる袖かな

あけ暮のそらにうき身はきへな／ゆめなりけるとみて  
もやむへく

紫のうへの物のけうつせさせたまへは六条の宮す所／のれるの人つきて名のりうらみ事をしたまひ

我身こそあらぬさまなれそれながら／空おほえする君かき  
みなれ

紫のうへは物のけによりて御くしいたゝきはかりそり／五戒をうけたまふ池のおものすゝしきなるをみ（二十七オ）／わたし  
たまふにはちすの花のうへの露をみたまひて

生とまる（註）ほとやはふへきたまさかに／はちすの露のかゝ

るはかりを

ちきりをかへなむとのたまひけるに

ちきりおかんこの世ならてもはちすはの／たまいる露のこゝ

ろへたつな

大臣この夜はかへりたまいて御物かたりありかしはき文こまやかに／かみてこしゝうかもとへつかはしけるを女三の宮に奉れは／あけてみんとしたまふに源氏おとゝわたりたまへはかくすへき／所なくてにしきのしとねのしたにをしはさみておき（二十七ウ）「たまひけるを文のはしすこしいてゝみへければ源氏何か／侍とりてみたまふにうたかひなきかしわ木の手とみ／しりたまふにこそといかなるうきめにかあはむすらん／とやすき心もしたまはずかしは木もきゝても玉／しるも身にそはす又おほろ月夜の内侍のかみ山／の御門の堂やもりしてゐたるにかさりをろして世を／そむくときこしめしあま衣おくりたまふ文にあまのよをよそにきかめやすまの浦に／もしほたれしもたれならなくに

廿一かしは木（二十八オ）」

(注)

小槌氏蔵本『源氏小鏡下』に記載されている和歌と『源氏物語』本文との明らかな異同については注を付した。【青】は青表紙本、【河】は河内本、【別】は別本とする。なお、どの系統にも共通の本文には特に表記はしていない。

(1) とはとひわたる — 【青】【別】ともよひわたる

【河】ともよひわたす

(2) そらかきくらし — そらかきくもり

(3) 久しきともの — 【青】ふるき世のとも 【河】ふるき

ものとも 【別】ふるき世ゝにも、ふるきよとみの

(4) あまつそらおとめか袖にかけしこゝろを — をとめこか  
あまの袖にかけし心は

(5) 秋の色 — 春の色

(6) きみにわか — きみにもし

(7) 船後 — 行方

(8) しらぬなみち — みえぬ浪路

(9) 詠み人が玉鬘となっているが乳母の誤りか。

(10) 名のみなりけり — 【青】さはらさりけり／ただし

【青】肖柏本【別】陽明家本、麥生本、阿里莫本は同一。

(11) うきにかへしもねをとめけむ — うきにしもかくねをとめけむ

(12) 袖をかへして — 袖をぬらして

(13) くもりなき — たくひなき【青】池田本、肖柏本、三条西家本

(14) むらさきのさと — むらさきのゆへ

(15) ゆへにもまさる — いふよりまさる

(16) けされぬ — たえせぬ

(17) わか身 — うき身／ただし【青】御物本は「わか・(うき)身」としている。

(18) 野わきふきむら雲まかふ夕部にも — 風さわきむら雲まかふ夕にも

(19) 雪ふれは — 雪深き

(20) たまさゝの — あふひたに

(21) 梅か香は — 花の香は

(22) むめか香にいとゝ心のしむるかな — 花のえにいとゝ心をしむるかな

(23) あこかれむ — あくかれむ

(24) 詠み人の「まめ人」と次の歌の詠み人の「かしはき」が逆になっている。

(25) 梅——枝

(26) 風もかよある——風もよくめる

(27) 「山の御門」の歌は本来は「六条院」の後に詠まれている。

(28) むらさきのいろにまかへるきくの花——むらさきの雲にまかへるきくのはな

(29) にしきとやみる——もみちとやみる

(30) めのまへにうれへはかわる世の中を——めにちかくうつれはかわる世の中を

(31) なをこりすまに名をやなかさむ——かけしやさらにこりすまの波

(32) 身にちかくあきやきぬらんめのまへに——身にちかく秋やきぬらんみるまゝに

(33) あを葉のやうすもうつろひにけり——あを葉の山もうつろひにけり

(34) うらのとまやを——はまのとまやを／ただし【別】阿里莫本は同一。

(35) こころのやみははれましもなし——はるけしもせし

(36) 恋わひてそのかたしろにてならせは——戀わふる人のかたみとてならせは

(37) 神のめくみ——神のしるし

(38) 詠み手が「あかし中宮」となっているが紫の上の誤りか。

(39) すみよしの——【青】【別】すみの江の／ただし【青】

横山本、池田本【河】【別】保坂本、阿里莫本は同一。

(40) まめ人はよこふゑその子はしやうのふゑ侍従はひちりきのやくにて女樂ならはせたまふ——實際は「今日の拍子合はせには童べを召さんとて、右の大殿の三郎、尚侍の君の御腹の兄弟笙の笛、左大将の御太郎横笛と吹かせて、簀子にさぶらはせたまふ。」である。

(41) 生とまる——きえとまる

#### (参考文献)

片桐洋一氏『異本源氏こかゝみ』(和泉書院) 昭和53年3月

武田孝氏『源氏小鏡高井家本 資料叢書4』昭和53年4月

池田亀鑑氏『源氏物語大成 普及版第三・四・五冊』(中央公

論社) 昭和59年

阿部秋生氏・秋山虔氏・今井源衛氏『新編日本古典文学全集源氏物語』(小学館) 平成7年

伊井春樹氏『源氏物語注釈書・享受史事典』(東京堂出版) 平成13年

岩坪健氏『源氏小鏡』諸本集成』(和泉書院) 平成18年

中野幸一氏『源氏一部抜書 源概抄 源氏こゝみ 源氏小鏡

光源氏一部調并詞』(武蔵野書院) 平成22年5月

中野幸一氏『九曜文庫蔵 源氏物語享受資料影印叢書6 源氏

小鏡慶長古活字本・源氏小鏡明暦版本』(勉誠出版) 平成22年

6月

中野幸一氏『九曜文庫蔵 源氏物語享受資料影印叢書7 源概

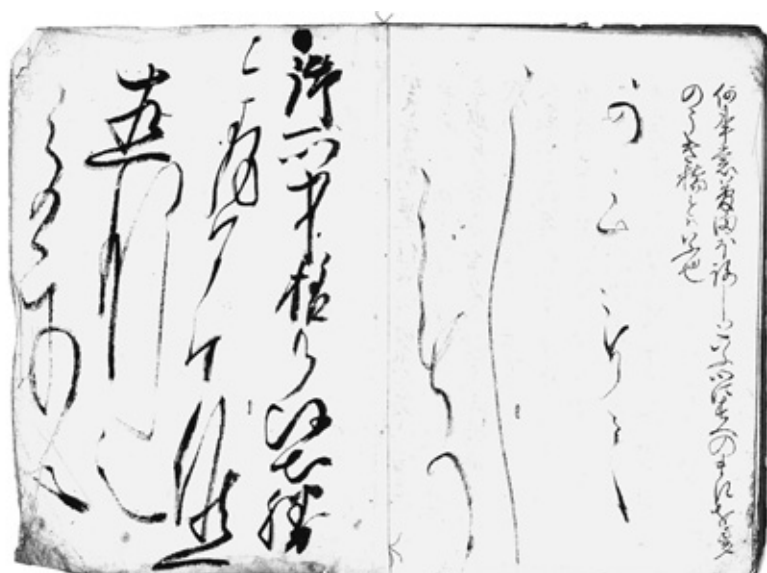
抄・源氏小鏡寛永古活字本』(勉誠出版) 平成22年6月



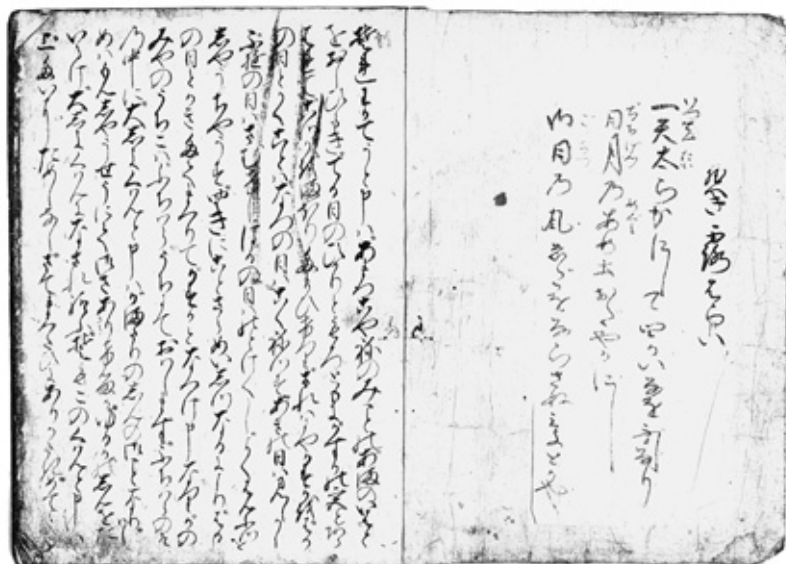
表紙



下巻 冒頭



下巻 末尾



上巻 冒頭



上巻 末尾